

音高分析によるムースルグスキイの歌曲研究

—作曲年代ごとの変化に着目して—

菊池 可奈子

(本講座大学院博士課程後期在学)

A Study on the Musorgsky's Songs Based on Analysis of Pitch: Focusing on the Change Related to the Date of Composition

Kanako KIKUCHI

1. はじめに

ムースルグスキイ Modest Petrovich Musorgsky (1839-1881) の歌曲集《子供部屋 *detskaya*》(1868-1872) は話し言葉の模倣の極致と評されており¹⁾、彼の写実主義は《子供部屋》で頂点に達したとも言われている²⁾。筆者も自身の修士論文から継続してこの歌曲集を取り上げ、研究を行ってきたが、確かに《子供部屋》の中にはロシア語の話し言葉を忠実に模倣したとみられる箇所が多数存在した³⁾。実際にテキストを朗読した音声試料と歌曲の旋律線との比較も行ったが、《子供部屋》はムースルグスキイのほかの歌曲や、ムースルグスキイ以外の作曲家が作曲した歌曲よりも、朗読試料と歌曲の旋律線とのイントネーションが高い割合で一致していた⁴⁾。

そこで本研究では、さらに多くのムースルグスキイの歌曲を研究対象として取り上げ、それらの朗読試料と旋律線との音高の一致率を導き出すことによって、年代による彼の歌曲の音高面における変化を概観し、それを通じてムースルグスキイの歌曲全体における歌曲集《子供部屋》の位置付けをより明確にすることを目的とする。

2. 実験

今回の実験では菊池(2010)⁵⁾と同様の手法を用いて、研究対象とする歌曲の旋律線と、その朗読試料との比較を行い、両者のイントネーションがどの程度一致するかを明らかにする。それに基づき、《子供部屋》を含めたムースルグスキイの歌曲における、年代に沿った音高面での変化を客観的に把握する。

2.1 対象とする歌曲

今回は、ムースルグスキイの歌曲全体をいわば縦断的に検討するため、彼の全66曲の歌曲の中から、その半数強にあたる35曲を研究対象として取り上げる。研究対象とした歌曲は、ムースルグスキイがバラキレフ Mily Alexeyevich Balakirev (1837-1910) の指導から抜け出し、独自の音楽語法を開拓しつつあった1864年から、死去の4年前であり、精力的に歌曲を作曲した最後の年でもある1877年までのものである。歌曲を選出する際には、極力1864年から1877年までの各年の作品を取り上げるよう留意した。また、《子供部屋》と同様に、ムースルグスキイが作詞を行った歌曲も一定数含まれるように配慮した。

次に研究対象として取り上げた35曲を提示する。なお、本研究中の楽曲タイトルおよびテキスト等の日本語表記はすべて伊藤一郎、一柳富美子による邦訳に依拠している⁶⁾。

表 1 研究対象とした歌曲一覧

作曲年	歌曲名	作詞者
1864	夜 <i>Noch</i> 第 1 稿	プーシキン
	夜 第 2 稿	ムーソルグスキイ翻案
1866	願い <i>Zelanie</i>	ハイネ(メイ露訳)
	私の涙からたくさんの花が咲きでた <i>Iz slez moikh viroslo mnogo</i>	ハイネ(ロシア語訳 詞者不詳)
	神学生 <i>Seminarian</i> 第 2 稿	ムーソルグスキイ
1867	お腹の白いお喋り鳥 <i>Strekotunya beloboka</i>	プーシキン
	茸取り <i>Po gribi</i>	メイ
	宴 <i>Pirushka</i>	コリツオーフ
	ドンのほとりの庭は花咲き <i>Po-nad donom sad tsvetet</i>	コリツオーフ
	雄山羊 <i>Kozyol</i>	ムーソルグスキイ
1868	みなしご <i>Sirotko</i>	ムーソルグスキイ
	ばあやと(子供部屋) <i>S nyaney</i>	ムーソルグスキイ
	子供の歌 <i>Dotskaya pesenka</i> 第 1 稿	メイ
	子供の歌 第 2 稿	
	イェリヨームシカの子守歌 <i>Kolibelnaya erylomushki</i> 第 1 稿	ネクラーフ
	イェリヨームシカの子守歌 第 2 稿	
1870.	隅っこで(子供部屋) <i>V ugli</i>	ムーソルグスキイ
	かぶと虫(子供部屋) <i>Zhuk</i>	ムーソルグスキイ
	お人形と(子供部屋) <i>S kukloy</i>	ムーソルグスキイ
	おやすみの前に(子供部屋) <i>Na son gryadushchiy</i>	ムーソルグスキイ
1871	夕べの歌 <i>Vechernyaya pesnka</i>	プレシチエーフ
1872	猫のマトロス(子供部屋) <i>Kot Matros</i>	ムーソルグスキイ
	木場で出かけた(子供部屋) <i>Poekhal na palochke</i>	ムーソルグスキイ
1874.	四つの壁に囲まれて(太陽なく) <i>V chetirekh stenakh</i>	クウーフ
	きみは人混みの中で私に気づかなかった(太陽なく) <i>mnya ti v tolpe ne uznala</i>	クウーフ
	空しき喧噪の日々は終わり(太陽なく) <i>Okonchen prazdniy shumni den</i>	クウーフ
	倦怠(太陽なく) <i>Skuchay</i>	クウーフ
	悲歌(太陽なく) <i>Yelegiya</i>	クウーフ
	川のほとりで(太陽なく) <i>Nad rekoy</i>	クウーフ
1875	不思議な女 <i>Neponyatnaya</i>	ムーソルグスキイ
1877	不幸は天から雷のように下されはしなかった <i>Ne bozhiim gromom udarilo</i>	トルストイ
	魂は静かに高空を飛んでいった <i>Gornimi tokho letela dusha nebecami</i>	トルストイ
	傲慢 <i>Spes</i>	トルストイ
	おお亜麻を紡ぐのは若者の誉れか? <i>Oy, chest li to molodtsu len pryasti?</i>	トルストイ
	悲しみは散ってゆき、消えてゆく <i>Rassevaetsya, rastupaetsya</i>	トルストイ

なお、ムーソルグスキイは歌曲の作曲を行っていない年もあるため、1864年から77年までのすべての年が揃っているわけではない。また、1864～66年がムーソルグスキイの見習期、1867～75年が成熟期、

1877年が晩年にあたる⁷⁾。

ムーソルグスキの朗唱法は、《子供部屋》の時期に頂点を迎え、1872年頃を境に方向転換したと言われている⁸⁾。方向転換後には、彼の歌曲はいっそう旋律的に着想されるようになり、言語学的特徴と旋律の密接な結び付きは、かなり緩やかなものとなった。そのような朗唱法の変化が音高面にも表れていれば、歌曲の旋律線と朗読試料の一致率は、《子供部屋》が作曲された時期である1868年から1872年までに向かって徐々に上昇し、その後やや下がって落ち着くといった傾向を見せると考えられる。

2.2 話者

今回の実験でテキストを読んだのは、ロシア語母語話者1名である。以後話者をAと呼ぶ。Aはモスクワ出身の30代男性である。

2.3 録音と分析手順

録音は筆者の研究室でリニアPCMレコーダー（SONY PCM-D50）および付属のマイクロフォンを用いて行った（サンプリング周波数48.00kHz、量子化ビット数24bit）。

録音した試料の分析は音声解析ソフトPraat⁹⁾を用いて行った。音節境界の計測は、音声波形、広帯域スペクトログラムを同時に表示した画面で、すべて手動で行った。そして同定した音節境界に基づいて、各音節の平均音高を抽出した。菊池（2010）と同様に、今回も朗読の音節ごとの平均音高を朗読の音高として扱っている。歌曲との比較のために朗読音声の音高はセント変換した（ $a=0\text{cent}$ ）。

歌曲の旋律線と朗読のイントネーションの比較方法は菊池（2010）と同様である。この比較方法では、歌曲と朗読試料の一致・不一致は、音価に関係なく、それぞれの音高の上昇・下降の方向にのみ基づいて判断する。つまり、各音節間の音高変化の方向が同一であれば一致、異なっていれば不一致とする。この基準に立脚して、1曲におけるすべての音節間で何パーセントの一致が見られるかを集計する。

歌曲においてテキストの1音節に音高の異なる複数の音符が与えられている部分は、集計対象から除外した。また、コンピューター上でのデータ処理が可能である録音のみを、データとして採用した。文の切れ目における音節間の音程関係は対象とならないよう配慮した。この文の切れ目は、テキストにおけるコンマおよびピリオドに基づいて決定した。

3. 結果と考察

以下に、朗読試料のイントネーションと歌曲の旋律線との一致率を示す。

表 2 研究対象とした歌曲の一致率

作曲年	歌曲名	作詞者	一致率
1864	夜 第1稿	プーシキン	21%
	夜 第2稿	ムーソルグスキイ翻案	40%
1866	願い	ハイネ(メイ露訳)	29%
	私の涙からたくさんの花が咲きでた	ハイネ(ロシア語訳詞者不詳)	23%
	神学生 第2稿	ムーソルグスキイ	22%
1867	お腹の白いお喋り鳥	プーシキン	29%
	茸取り	メイ	29%
	宴	コリツオーフ	42%
	ドンのひとつの庭は花咲き	コリツオーフ	28%
	雄山羊	ムーソルグスキイ	36%
1868	みなしご	ムーソルグスキイ	34%
	ばあやと(子供部屋)	ムーソルグスキイ	48%
	子供の歌 第1稿	メイ	9%

	子供の歌 第2稿		12%
	イェリョームシカの子守歌 第1稿	ネクラースフ	36%
	イェリョームシカの子守歌 第2稿		36%
1870.	隅っこで(子供部屋)	ムーソルグスキイ	53%
	かぶと虫(子供部屋)	ムーソルグスキイ	49%
	お人形と(子供部屋)	ムーソルグスキイ	38%
	おやすみの前に(子供部屋)	ムーソルグスキイ	45%
1871	タベの歌	プレシチューエフ	16%
1872	猫のマトロス(子供部屋)	ムーソルグスキイ	41%
	木場で出かけた(子供部屋)	ムーソルグスキイ	40%
1874.	四つの壁に囲まれて(太陽なく)	クトゥーフ	34%
	きみは人混みの中で私に気づかなかった(太陽なく)	クトゥーフ	27%
	空しき喧噪の日は終わり(太陽なく)	クトゥーフ	35%
	倦怠(太陽なく)	クトゥーフ	40%
	悲歌(太陽なく)	クトゥーフ	27%
	川のほとりで(太陽なく)	クトゥーフ	32%
1875	不思議な女	ムーソルグスキイ	36%
1877	不幸は天から雷のように下されはしなかった	トルストイ	34%
	魂は静かに高空を飛んでいった	トルストイ	26%
	傲慢	トルストイ	37%
	おお亜麻を紡ぐのは若者の誉れか?	トルストイ	37%
	悲しみは散ってゆき、消えてゆく	トルストイ	46%

この結果から、以下3点のことがわかる。まず1点目は、歌曲と朗読の一致率は見習期には低く、円熟期に高まり、晩年には30%台で安定するという。2点目は、《子供部屋》に向かって一致率が徐々に上昇するというよりは、《子供部屋》に収録されている歌曲の旋律と朗読の一致率が飛びぬけて高いということ。3点目は、ムーソルグスキイ自身が作詞を行った歌曲は〈神学生〉を除いてすべて30%以上の一致率が出ていることである。

まず1点目であるが、1866年までの見習期の歌曲は、〈夜〉第2稿を除いてすべてが30%未満である。それが、年代が進むにつれ徐々に30%を越える作品が多くなり、晩年の歌曲では30%未満のものは〈魂は静かに高空を飛んでいった〉のみである。年代が下るにつれて明確に数値が上昇していくわけではないが、当初の予想通り、ある程度の傾向は見て取れると言ってよいだろう。1874年以降の歌曲は12曲中9曲が30%以上の一致率となっており、ムーソルグスキイが自然な朗唱法と歌曲の旋律的要素を組み合わせた時期の作品はおもに30%台の結果が出ていると言える。単純に旋律線と朗読のイントネーションの一致率から鑑みると、一致率が30%未満の歌曲は朗唱法があまり考慮されておらず、一致率が40%を超える歌曲はロシア語のイントネーションが考慮されている作品とみなすことができる。

次に2点目であるが、当初の予想では《子供部屋》が作曲された時期に向けて徐々に一致率が高くなっていくのではないかと考えていたが、結果を見ると円熟期の歌曲は《子供部屋》に収録されている作品のみが飛びぬけて高い結果となっている。表を見ると分かるように、歌曲集《子供部屋》の一致率は35曲の中でも著しく高い。一致率40%未満の曲が全体の約7割を占める中で、《子供部屋》に収録されている7曲は38~53%という比較的高い結果となっている。一致率が45%を超えているのは、《子供部屋》に収録されている〈ばあやと〉、〈隅っこで〉、〈かぶと虫〉、〈おやすみの前に〉以外では、晩年の歌曲〈悲しみは散ってゆき、消えてゆく〉のみである。このような結果から、《子供部屋》はムーソルグスキイの歌曲のなかでもとくに朗唱法に配慮がなされた作品であったと言えるだろう。

《子供部屋》が作曲された時期である1868年から1872年にかけて作曲された歌曲は、今回分析対象と

した歌曲以外ではムースルグスキイ作詞の歌曲〈のぞきからくり Rayok〉1曲のみである。したがって今回取り上げた歌曲以外にはこの時期に作曲された歌曲はほとんどないと言ってよいが、その時期に限って結果を見ると、《子供部屋》以外の曲はそこまで高い一致率とはなっていない。とくに、1868年作曲の〈子供の歌〉は、第1稿、第2稿ともに20%を切っている。第1稿の9%と言うのは、今回分析を行った歌曲35曲の中でもっとも低い値である。

今回取り上げた1868年から1872年までに作曲されたほかの歌曲と《子供部屋》に収録されている歌曲の違いとして挙げられるのは、《子供部屋》が子供の話し言葉を題材にして作曲されている点である。既存のロシア詩では脚韻やリズムが重要視されているため、登場人物に特有の話し方などはテキストに使用されることはない。しかし《子供部屋》は子供の話し言葉を反映させたテキストであるため、子供特有の言い方などが多数使用されている。したがって、もともと子供の話し言葉のイントネーションを音楽化することを目的として、歌曲集《子供部屋》に着手したのではないかという推測がなされる。先ほど言及した〈子供の歌〉はメイ Lev Aleksandrovich Mey (1822-1862) 作詞であり、円熟期に作曲された歌曲であっても、それが既存の詩に曲をつけたものなのか、それともムースルグスキイ自ら作詞したものなのかによって、ロシア語のイントネーションに配慮しているか否かに差が出ていると考えられる。それを裏付けるように、1871年に作曲されたプレシチューエフ Aleksey Nikolaevich Pleshcheev (1825-1893) 作詞の歌曲〈夕べの歌〉でも16%という低い一致率が出ている。

最後に3点目であるが、ムースルグスキイ自身が作詞した歌曲は、それが書かれた年代に関係なくそのほとんどで比較的高い一致率が出ている。見習期に作曲された〈夜〉第2稿も、第1稿よりも大幅にその一致率が上がっている。この〈夜〉第2稿は、第1稿でテキストに用いたプーシキン Aleksandr Sergeevich Pushkin (1799-1837) の詩を、その大意のみをとってムースルグスキイが大幅に改編したものである。ムースルグスキイは、たびたび既存のテキストに伝統的な手法で音楽をつけ、のちにテキストを書き直し、最終的に音楽を作り直すという作業を行っている。書き直されたテキストは原詩の韻律などを崩され、組み立てられた詩というよりは熱烈な語りとなっている¹⁰⁾。今回このように〈夜〉の第1稿と第2稿で一致率に差が出たことから、このようなムースルグスキイのテキストの改変および作詞は、ロシア語の自然なイントネーションを歌曲に反映させたいという狙いがその背景にあったのではないかと考えることができる。

しかし、1866年に作曲された〈神学生〉だけは例外的に、今回取り上げたムースルグスキイ作詞の歌曲の中で唯一その一致率が30%を下回っている。この歌曲は、神学生がラテン語の勉強に打ち込もうとするものの、司祭の娘のことが頭から離れず結局勉強が手につかないという内容で、音楽による写実主義、皮肉と喜劇に満ちあふれた現実主義の要素が含まれると評されている¹¹⁾。ところが今回の実験では、全体の中でも比較的低い数値である22%という一致率が出た。写実主義と評されるムースルグスキイ作詞の歌曲において、このようにロシア語のイントネーションと一致していないという結果が出た要因としては、ムースルグスキイの写実主義・現実主義における2つの要素が関係しているのではないかと考えられる。

前述のように、ムースルグスキイの現実主義には2つの要素があり、まず1つめはロシア語のイントネーションを旋律線に反映させる朗唱法である。この点に関してはムースルグスキイ自身もたびたび、自分の音楽は話し言葉の芸術的再現でなければならず、話し言葉の響きを旋律に反映させたいという趣旨のことを述べている¹²⁾。今回の実験の手法を用いた分析も、音高面における朗唱法の傾向を明らかにすることを目的としている。これに対してもうひとつの現実主義的要素は、ムースルグスキイのロシアの民衆に対する思いである。芸術をできる限り生活に、とくにロシアの民衆の生活に近づけたいという欲求をムースルグスキイは抱いており¹³⁾、彼が自ら作詞したテキストの登場人物は、若い女性に恋をする白痴の男性や、雄山羊のことは怖がるのに自分と親子ほど年の離れた悪魔のような結婚相手の老人のことはまったく怖がらない少女、酔っ払いや子供たちといった、特徴的なロシアの民衆である。このような人々に焦点を当てた音楽作品の創作が、彼のもう1つの大きな作曲理念であった。〈神学生〉も、その対象となっているのは雑念を捨てきれないロシア人の若者であり、〈神学生〉ではロシア語そのもののイントネーションではなくそこで描写する民衆に現実主義、リアリズムを求めたのではないだろうか。〈神学生〉は諷刺の道具として教会音楽のモチーフをパロディ化しており¹⁴⁾、ロシアの民衆を美化・理想化することなく、写実的に描く事が〈神学生〉の現実主義的要素であったと言える。以上のことから、ムースルグスキイ作詞の歌曲においては、現実主義をそのテキストの内容に見出したものと、ロシア語のイントネーションに見出

したものの2種類があるのではないかと考えられる。ムーソルグスキイが作詞を行った歌曲は全部で19曲あり、今回取り上げたものを除くとまだ7曲残っている。今後その7曲についても実験的手法を用いて分析を行い、ムーソルグスキイ作詞の歌曲の音高面にどのような傾向があるのか考察を行う必要がある。

4. おわりに

今回ムーソルグスキイの歌曲35曲の旋律線と朗読のイントネーションとの比較を行ったことで、ムーソルグスキイの歌曲作品における、年代ごとの大まかな傾向を読み取ることができた。当初の予想通り、見習い期には旋律線と朗読のイントネーションの一致率の低い歌曲が多く、それが円熟期には一致率の高い歌曲の割合が増え、晩年には一致率が30%台で安定した。しかし、それは年代が下るごとに徐々に変化したわけではなく、作詞がムーソルグスキイ自身によるものかどうかによってその結果には差異が生じた。また、作詞がムーソルグスキイによるものであっても、テキストの内容面から現実主義を追求したものと、ロシア語イントネーションを再現しようとしたものの2種類があると考えられる。

ムーソルグスキイはオペラ《結婚 *zhenit'ba*》(未完。第1幕のみ1868年完成。)において、ダルゴムィーシンスキイ Aleksandr Sergeevich Dargomuzhskii (1813-1869) に倣って、ロシア語のイントネーションをそのままオペラに取り入れようという実験を行っている。《結婚》の作曲を開始したのが1868年であるため、ムーソルグスキイが本格的に朗唱法に取り組み始めたのはその時期であると考えられる。ムーソルグスキイ作詞の歌曲の中で、今回低い結果が出た〈神学生〉の作曲はその2年前である1866年であり、1868年までの時期は、ロシア語のイントネーションを再現しようという現実主義よりも、ロシアの民衆の姿をそのままに音楽で描こうという現実主義のほうが優っていたのではないだろうか。1868年は《子供部屋》の作曲を開始した時期であり、《結婚》と平行して、歌曲でもロシア語のイントネーションを音楽に移しかえる試みを行っていたと考えられる。

ムーソルグスキイが精力的に自ら作詞を行っていたのは1866年から1870年であり、その時期に書かれたテキストは、《子供部屋》に収録されているものを除いてほとんどが諷刺的な視点を持っている。そこで描かれているのは、ロシアのリアルな民衆の姿であり、生活である。ムーソルグスキイの歌曲を研究するにあたり、ロシア語イントネーションを再現しようとした現実主義だけでなく、そのようなロシアの民衆の姿に焦点を当てた現実主義の側面もあることは重視すべき点である。

また、今回は朗読のイントネーションと歌曲の旋律線の、音高面における一致率のみに注目して考察を行ったが、より内容を深めるためには両者の細微な音高の上がり下がりについても分析を行う必要があると考える。既存の詩に曲をつけた場合と、ムーソルグスキイ自身が作詞したものに曲をつけた場合で、その旋律線に異なる特徴が見られるのかなどを解明していくことが、今後の課題である。

引用・参考文献

- 1) Maes, Francis. *A History of Russian music, from Kamarinskaya to BabiYar*. The University of California Press, 2002 [マース, フランシス著 森田稔 梅津紀雄 中田朱美訳『ロシア音楽史 《カマーリンスカヤ》から《バービー・ヤール》まで』 春秋社 2006] pp.147-148.
- 2) スティーブン, デニス著 石田徹 石田美栄訳『歌曲の歴史』音楽之友社 1986 [Stevens, Denis. *A History of Song*. W. W. Norton, 1970.] p.395.
- 3) 菊池可奈子「ムーソルグスキイの歌曲集《子供部屋》にみる朗唱法－音高分析の視点から－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第59号 2010 pp.409-416.
- 4) 菊池可奈子「ムーソルクスキイの歌曲研究－その朗唱法分析を中心に－」広島大学大学院 修士論文 2008
- 5) 前掲書 3
- 6) 伊東一郎 一柳富美子編訳『ムーソルグスキイ歌曲歌詞対訳全集』新潮社 1988
- 7) Oldani, Robert William. "Musorgsky, Modest Petrivich." In *the New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed., 2001, vol. 17, p.550.
- 8) 前掲書 1 p.148.
- 9) Boersma, Paul & Weenink, David (2010) . Praat:doing phonetics by computer. Version 5.1.04, from

<http://www.praat.org/>

- 10) Kearney, Leslie. *Linguistic and musical structure in Musorgsky's vocal music*. Yale University, UMI Dissertation Services, 1992. p.162.
- 11) 前掲書 7 p.546.
- 12) Taruskin, Richard. *Musorgsky: eight essays and an epilogue*. Princeton University Press, 1993. pp.73-74.
- 13) 前掲書 7 p.551.
- 14) 前掲書 1 p.146.